

令和6年度 第2回桐生市青少年問題協議会 結果報告

日 時：令和7年2月13日（木）14：00～15：20

場 所：青年の家 講堂

出席者：荒木恵司、園田基博、工藤英人、大木晋（代：市川貴洋）、中村清、青柳尚志、松島宏明、青柳明美、村井正則、上原敏行、蛭間好江、周藤寛、白崎あつ子、青木講一、加藤秀幸、橋本繁栄、間中一枝、台善一、高松富雄、金子公江（教育環境課教育支援係）
須藤まりこ、星野正史、金子秀明、下山秀人、新井礼子、関口宏高

<全体会>

- 1 開 会 司会：星野課長
- 2 挨 拶 荒木市長
- 3 報 告

- ・桐生市いじめ防止対策として、桐生市教育委員会の取組、桐生市いじめ防止子ども会議の概要、今年度のいじめ防止対策の成果と課題について、金子教育支援係長が報告した。

<質疑なし>

- ・「桐生市明るい家庭・地域づくり運動」推進市民大会について、関口主査が報告した。昨年度よりも参加人数を増やしながらもコンパクトな形で開催できた。推進標語、イメージ写真は、「明るい家庭・地域づくり」について考える機会として、市内の学校や幼・保・こども園、一般からの作品を募集し、優秀作品を表彰した。また、少年の主張の発表は、考えさせられる内容で素晴らしかった。来年度以降、内容や参加人数等を青少年愛育運動推進会議にて検討する。

<質疑なし>

- ・令和5・6年度桐生市青少年問題協議会で話し合われた内容等について松島部会長より報告。この会議は桐生市長をトップに据えた、青少年問題について検討するとても大きな意味を持つ会議。過去には会議の中で答申をまとめて発信するという形式をとっていたが、発信力に欠ける部分もあった。令和3・4年度の会議においては会議結果をポスターにまとめて発信した。令和5・6年度の会議では、コロナ禍後の社会的な課題について、2年間の会議の中で様々に議論されてきた。これらをさらに掘り下げて次の2年につないでいきたい。

<質疑なし>

4 協 議

- ・チラシの作成及び配布について、金子青少年係長から説明。「ネット見守り活動委員会の活動を周知することで、子どもたちのネット利用について、いつも大人が見守って

いるというメッセージや意識づけをすることにより、少しでも抑止効果につながれば」・「桐生の子どもを守るおりひめさまの標語を発信することにより親子でネット利用について考えてもらう機会とする」等の目的でチラシを作成・配布したい。

<質疑なし>

承認

4 閉 会 司会：星野課長

<専門部会> 14：30～15：20

合同専門部会（講堂）

1 開 会 司会：星野課長

2 挨拶 松島部会長（青少愛会長）

3 協 議 <議長：松島部会長>

委員：この2年間の議論を振り返ると、子ども対策部会は、主に学校を舞台に様々な問題について議論してきた。家庭・地域対策部会では、構成メンバーが非常に多様であることから、様々な事象に対する対策（未然に防ぐ）ということをテーマに議論を重ねた。本日は、この2年間それぞれの部会で話し合われてきた諸問題の背景には何があるか議論したい。例えば、学校規模適正配置なら地域の構造の変化や少子化が原因と考えられる。では、いじめという問題で言うならどんな背景が考えられるか。

委員：子どもたちの、人間関係作り能力については課題があると感じる。

委員：スマホの普及（情報化）、コロナ禍で大きく環境が変わった。これが大きくかかわっていると思う。

委員：価値観が変わってきた。人と人をつなぐ行事をやろうとしても、必ず苦勞が付きまとう。以前は、当たり前だと思っていた苦勞が今は受け入れられない。結果、人と人のつながりが希薄になる。地域の力も低下し、子どもたちの体験・経験の場もなくなってきている。そんな環境の変化を感じる。

委員：体験の不足は感じる。例えば「遊び」でいうと、昔と違って友達で集まっても、それぞれ別々にゲームをしているような状況をよく見聞きする。本校は校内に学童があり、そこにいる子どもたちが放課後、校庭で思い切り遊んでいる姿を見ると、とても良いと思う。遊びの中で、起きたトラブルを対面で解決することで成長でき、人間関係が構築されるのが健全だと思う。

委員：学童で指導員が、子どもを厳しく注意したときにクレームが入ることがある。価値

観の違いを感じる。挨拶が大事という家庭もあれば、そんなのはどうでもいいという家庭もある。社会が様々な面で効率化を求めた結果、人として大切な部分にも違いが出てきてしまったのだと思う。

委員：子どもによって違いが大きく、「子どもをこうやって指導していこう」という軸がなかなか見いだせなくなった。子ども同士でトラブルが起こらないように指導していくにも、子どもによる違いが以前と比べて大きくなり、その子の特性を見て対応しなければならないため、難しさを感じるようになった。

委員：警察は悪いことをした人を捕まえる機関である。昨年度、桐生駅前が非常に荒れていた。3月には暴走族150名が蝟集するというようなことも起きていた。しかし、丁寧に検挙・指導を重ねほぼ壊滅させることができた。逮捕され、少年鑑別所へ行った子どもたちに面会すると、多くは見違えるほど良い子になっているという話を聞いた。学校・家庭の教育が基本だと思うが、このような矯正施設も含めて、あらゆる角度からの教育が必要な現状であるということを強く感じた。

委員：家庭・地域対策部会からの視点ではどう感じるか。

委員：学童に携わっているが、子どもたちがゲームを持ち込まなければ、異年齢でよく遊んでいる姿を見る。しっかりルールがある家庭は家族の団欒の時間があるが、そのような家庭は減ってきている。だから、ネット見守り活動委員会の活動を広めることはとても有益であると考える。

家庭・地域対策部会では「未然に防ぐ」ということをテーマに話し合ってきた。その中でまずは「知ること」「学ぶこと」が大切であるということが出てきた。また、「見守る」ということの大切さも話し合われた。この視点を持って今後もやっていきたい。

委員：根底にあるものは、変化・格差の問題が大きいと思われる。情報化（スマホの普及）がコロナによって、違う方向にもっていかれたというのが一つ大きな背景としてありそうである。また、違う面からも考えてみたい。家庭に変化はあるのか。

委員：いろいろな保護者と話をする中で、保護者の子育てに対する価値観が大きく変わってきたように思う。保護者同士も年齢差があり、スマホの与え方など家庭による差がとても大きい。

委員：私たちの世代は、スマホについて知らないことがまだまだたくさんある。でも、昨今のニュースで若者たちが犯罪の手先にされている様子などを見ると、防ぐためにはもっと大人も学んでいかなければと思う。ネットの知識に対する格差はあるかもしれないが、「子どもが大切」という部分では、皆同じ気持ちで繋がって活動している。

委員：社会問題の多くの背景にあるのは「依存」。モノとモノの距離感、人間と人間の距離感がうまくいかないことから起きているケースが多い。

例えば、問題行動を起こす子どもは、自分の行動に責任を持てずに、誰かからこういわれたからという理由（他責）で問題を起こす。その一方で、突然不登校になる子どもの中には、自分の意見が言えない子どもが多い。こういう子どもは周りの意

見に振り回され、どうしていいかわからなくなって不登校になるケースが多い。そして自分のことを責めて（自責）、リストカット・オーバードーズと進んでしまう。このように不登校一つとっても二分化している。

先日、ある高校で薬物乱用防止教室の講師をしたが、非常に反応が悪かった。やはり、若者に啓蒙活動をしよと思ったらなるべく幼いうちに行う方がより効果的であるというように感じた。

委員：「依存」をテーマに取り組むのも一つ。今後、検討していかななくてはならない。問題には原因と対処がある。ここを考えていく必要がある。現れている事象は一つでも、対処はケースバイケースである。いじめを例にすると、クラス・学校全員がいじめを防ぐということを考え続けるという対処が一つ。いじめが悪質になってしまったら警察が入るというのも一つの対処。

我々は一つの原因に一つの対処と考えてしまいがちだけれど、その原因は様々であり、対処もそれぞれあるから、全部のことに対処するのは、現実的には難しいと思う。その対処の形について議論してみたい。

委員：「自責」「他責」という話があったが、それぞれが抱えている問題に「寄り添う」「励ます」という部分がなくなっている。そういう世の中の融通の利かなさがある。大人になっても意志が変わらずブレない人たちに共通にみられる要素は「到達可能な目標を持っている」「そばに親以外の大人がいる」ということである。「自責」「他責」を抱えている子どもに、そばにいて寄り添える存在というのはやはり大事なんだと思う。

委員：少子化・コミュニケーションツールの変化・シングルマザーの問題など、様々な環境要因があるが、これを何とかしようというのは難しい。子どもは、本来エゴな生き物。それを成長の過程で思いやりの気持ちを育てていくが、その経験が減っているのが現状である。対処としては、子ども自身が、自分たちに起きている問題について考える環境を大人が整えることだと思う。例えば、いじめ防止子ども会議は限られた生徒の中でやっているが、全児童・生徒が考える環境を整える必要がある。子どもたちにとって、価値観が多様化する中、何が正解かわからないという問題があると思う。昔、日本とヨーロッパの教育を比較したビデオがあった（けんかをした時にどう解決するか）。日本は泣いている子がいると、周りの友達が助けて解決しようとするが、ヨーロッパでは、先生が介入し理詰めで本人達が分かるまで説得する。日本は、子どもたちが自分で話し合って解決に導くというのが合っているのかなと思った。

委員：自分が参加していた家庭・地域対策部会では、何か問題が起きた時に相談先が良くわからないという意見が多く聞かれた。相談先の周知も含めて、各団体の横の連携をもっと高めていく必要性を感じた。また、ネット見守り活動委員会に初期から参加しているが、最近は新しいネット詐欺がどんどん出てきて、委員自身も知らないようなものが多く出てきている。新しいネット犯罪に対する情報共有の必要性を強く感じる。

委員：先ほどの依存の問題から、近くの大人が寄り添うという話があったが、ボーイスカウト・子育連の視点からも何か話していただきたい。

委員：ボーイスカウトの基本理念は、野外活動を通じて健全育成を図ることにある。20数年前は群馬県連盟だけで5000人の指導者がいて、桐生地区だけでも2000人いた。現在は、200人に減ってしまい、ボーイスカウトの活動の特徴である班制度を中心とした、異年齢集団の団体活動が難しい状況にある。少子化の影響を感じるが、それだけではなくて個が大事にされる今の状況の中、集団行動はますます難しくなっている。コロナが大きなターニングポイントであった。リモートでの会議・会合はやっぱりコミュニケーションとして効果的ではないと感じる。

委員：子育連では、少子化の影響もあるが、役員をやりたくない親御さんが増えてきたところにコロナ禍があり、活動ができなくなった。コロナ禍が終わり、様々な行事をリスタートしようとしたときに、人が集まらなくなってしまった。そこで、人を動かすための催しものやろうということで令和4年10月から「子どもまつり」をはじめた。準備は大変だが、子どもが動くようになった。毎年、参加してくれる子どもが増えている。ミニきりゅうもそうだが、楽しい催しがあれば子どもは参加してくれる。やはり大人が、「子どもが動くきっかけ」を作ってあげることが大切。協力してもらえる大人を増やしていかないと、子ども会はなくなってしまう。年齢が違う子どもが集まって交流できる場を、今後もできるだけ作っていきたい。

委員：たくさんのご意見をいただいた。色々なエッセンスがつまっているなので、それを精査して次年度以降に引き継いでいきたい。

今日は、「起きていることの背景・根底にあるものは何なのか？」ということと「対処の角度と質・量・方法を見直すこと」等について考えてきた。今後は、各団体のありようも含めて考えていくことが必要。

最後に、資料最後のチラシの「桐生の子どもを守るおりひめさま」は上原委員の発案。ありがとうございました。

4 閉会 司会：星野課長